

第33回 寒地技術シンポジウムのお知らせ

第33回寒地技術シンポジウムを札幌市(札幌コンベンションセンター)で開催いたします。寒地技術に関心を持つ多くの皆さまのお申込み、参加をお待ちしております。詳しくはホームページ <http://www.decnet.or.jp/>をご覧ください。



[寒地技術シンポジウム]ウェブサイト

- ◆開催日：2017年11月29日(水)~12月1日(金)
- ◆会場：札幌コンベンションセンター(札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1)
- ◆内容：

- ★論文(査読・報告論文共通で口頭発表を行います)
 - (1)査読論文→登録・査読用概要提出……………受付終了しました
 - (2)報告論文→登録・概要提出……………お問合せください
- ★技術展示→お申込み……………お問合せください
- ★講演論文集(CD-ROM)・概要集(冊子)お申込み(有料)…11月2日(木)
 - ※詳しくはウェブサイトをご覧ください。

お問合せ：(一社)北海道開発技術センター
 「寒地技術シンポジウム」担当係(担当:向井・新森)
 TEL:011-738-3363 FAX:011-738-1889



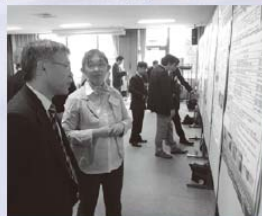
会場の様子(第32回)



特別講演の様子(第32回)



トークセッションの様子(第32回)



ポスター発表の様子(第31回)(写真:下)



写真左:デマンドバス(乗合タクシー)



写真右:路線バス乗車体験

編集後記

先日、「第33回福島町カントリーフェスティバル」に、公共交通の利用促進を目的としたバスを出展してきました。福島町では、平成26年度からデマンドバス(乗合タクシー)を運行しており、地域の足として定着しつつあります。今回は、そのデマンドバスの回数券が発行されることになり、販売も兼ねてPRすることに。また合わせて路線バスの乗車体験も実施しました。会場となった青函トンネル記念館の駐車場は、目の前に大きなスルメ加工場があり、風に吹かれてスルメの香りが…笑。さすがスルメの町!福島町!!(M.K)



dec monthly

2017.10.1 vol.385 デックマンスリー



- Monthly Topic(マンズリートピック)
[研究紹介] 地方消滅・地方創生論における思想を探る
 dec研究員 伊地知 恭右[博士(工学)]
- dec Report(デックリポート)
 dec自主研究 沿道の環境を守り、活用する団体との共同研究事業研究発表会

dec Interview >>> 八戸ポータルミュージアム「はっち」館長 安原 清友 氏

青森県八戸市は夏の「八戸三社大祭」、冬の「八戸えんぶり」と伝統の祭りが息づくまち。その中心市街地に全国の地域づくりや文化行政に携わる人々の注目を集め続けている公立施設「八戸ポータルミュージアム「はっち」」(以下「はっち」)があります。市職員で館長の安原清友氏をお訪ねしました。

「はっち」は2011年2月開館の八戸市直営の文化観光交流施設(<http://hacchi.jp>)です。中心街の三日町に総事業費42億円で建設され、5階建・延床面積約6500㎡の施設内にはイベント広場や観光展示、シアター、各種スタジオ、カフェ、ショップなど多彩なスペースが設けられています。これは市にとって大変思い切った施設整備だったのですが、目的は何だったのでしょうか。

「はっち」の役割を一言で表せば「まちを元気にする施設」です。中心市街地の衰退は、多くの地方都市が抱える課題ですが、八戸市でも昭和50年代から平成初期をピークに中心街のにぎわいが失われ、歩行者通行量、小売業の販売額減少が大きな悩みでした。中心街に人が来るきっかけをつくり、にぎわいを取り戻すことが施設整備の目的です。

ただ、最初に構想されたのは八戸三社大祭という、地域を代表する夏祭りの山車を展示する山車会館を主体と

した地域観光交流施設でした。2005年春、前市長のもとで経済界などの要望を受けてまとめられた構想でしたが、同年11月、現在の小林真市長に交代してから大きく方針転換されました。山車会館では市民も観光客も繰り返し訪れることにはなりにくい、もっと積極的に市民交流や観光PRができる複合型観光交流施設を、ということで、06年に新たな基本構想が策定されたのです。

打ち出されたコンセプトは「つながる、うみだす、ひろがる」。施設の具体的なイメージがつかみにくいこともあり、当初は議会、市民、マスコミから「一体、行政が街なかは何を建てるのか」と風当たりは非常に強かった。当時の担当者(風根知子 中心市街地活性化推進室長・後に初代館長)はとても苦勞して構想の実現にこぎつけたと思います。

安原さんは今年4月、開館7年目となる「はっち」の三代目館長に就任されました。「はっち」の事業運営で大切にされていることは何でしょうか。

開館後の「はっち」は市内外からさまざまな面で評価をいただけてきましたが、私も館長になって改めて皆さんの市民力が花開く場になっていることを実感しています。

「はっち」のコンセプトは「地域の資源を大事に想いながら、まちの新しい魅力を創り出す」こと。地域資源のなかで特に大事にしているのが「人」です。例えば、

地域の資源を大事にすることで市民の誇りを醸成し、市民力を支えることが「はっち」の役割。それによって地方創生を後押しします。

dec Interview

やすはら きよとも

1969年青森市生まれ。弘前大学人文学部卒業後、92年八戸市庁入庁。03年に青森県文化観光部、07-08年に八戸観光コンベンション協会に意向、まちづくり文化推進室などを経て、2017年から現職。津軽育ちだが八戸の「人」と「食」をこよなく愛する。



八戸を紹介する観光展示は高橋みのるさんほか市民作家の作品で構成されていますが、そこには「市民そのものが八戸の魅力」という思いが込められています。

「はっち」の事業は①会所場づくり、②貸館事業、③自主事業、の3本柱で、①は誰でも気軽に立ち寄って、交流を楽しんだり、地域文化に触れられる場をつくることです。②の貸館事業ではシアターやギャラリーなど多様なスペースを提供して市民活動を応援していますが、稼働率は高く、市民活動の活発さ、多彩さを感じています。③の自主事業では「はっち」が主体となつてにぎわい創出、文化芸術振興、ものづくり振興、観光振興を目指して、さまざまな活動を展開しています。

初代館長は「他に誇れる地域資源がこんなにたくさんある」と気づいてもらえる施設にしよう」と、立ち上がりから大変な熱意で取り組みましたが、そうした地域資源を大事にする姿勢がシビック・プライド(市民の誇り)につながり、貸館として市民活動に活用されることで多くの人々が繰り返し集う場として定着してきたのだと思います。

当初の目的であった中心市街地活性化の効果をはじめ、成果は大きいですね。

来館者数の当初目標は年間65万人でしたが、開館後は毎年95万人以上を維持しています。中心街の歩行者通行量も開館前の2010年度比で12年度は「はっち」前で89%増、中心街全体で33%増に達し、中心街の新規事業所は13年度までに50事業所に上りました。また、近隣の大型空きビルの民間再開発を促す要因になり得たと思います。

八戸市は従来、「アートのまちづくり」を進めてきましたが、そこには多様な地域文化を分け隔てなく育てていこうという柔軟な姿勢があると思います。八戸発祥だと言われる「デコトラ」(デコレーション・トラック)のイベントに「八戸市長杯」で協賛していることなども一例でしょう。「はっち」でも、人のつながりをテーマにした親しみやすいコミュニケーション・アートに力を入れています。商店街の店先に店主の人となりや吹き出しのシートに書いて貼り付けたというアー

ティスト山本耕一郎さんの「八戸のうわさ」プロジェクトはその一つ。作家が潜在して創作活動が行えるレジデンス機能を持っていることも「はっち」の特徴です。

このような取り組みについて、八戸市は「南郷アート・プロジェクト」などを含む文化施策全般について2013年度に文化庁長官表彰(文化芸術創造都市部門)を、「はっち」は16年度の地域創造大賞(総務大臣賞)を受賞するなど全国レベルで評価、注目いただいています。おかげさまで、「はっち」には現在も全国から地方議員やまちづくり会社の方々など視察の方が頻繁に来館されています。

「はっち」の取り組みは地方創生の先行モデルとしても注目されていると思います。「地方創生」という文脈で「はっち」の果たしている役割をどう見ておられますか。

「地方創生」の概念は広いと思いますが、国の政策では「まち・ひと・しごと(創生)」という言い方もされています。その言葉で言えば「はっち」の取り組みは、まさにこの3つにあてはまっていると思います。つまり、「まち」は中心街の活性化を、「ひと」は市民を大事にすることで、「しごと」は起業支援の取り組みです。

自主事業の柱の一つである「ものづくりの振興」では、「ものづくりスタジオ」(入居型の工房兼ショップ)で食やクラフトなど新商品の制作・販売を志す人にスペースを貸し出し、ここでの体験を出発点に中心街の空き店舗への展開をしてもらえればと支援しています。「はっち」の取り組みは「稼ぐ」ことも視野に入れており、ものづくりや芸術文化振興を通じて地方創生を後押ししていると言えそうです。

観光客や移住者、仕事が増えることが地方創生でしょうが、その前提は私たち市民が地域の魅力を知り、それを誇りに思っただけで暮らすことだと思います。「はっち」は市民の地域に対する誇りを醸成することで地方創生にかかわっていると思います。

では、今後の「はっち」の取り組みや八戸のまちづくりの方向性について

お聞かせください。

もともと八戸は夏と冬のお祭りである三社大祭の山車組やえんぶり組が地区に根付き、地域コミュニティが活発な土地柄だと思いますが、行政の役割はそうした地域コミュニティのベースをしっかり維持し、その上で「はっち」のような施設がまちを元気にする役割を担っていくのだと考えています。

これからの「はっち」としては、中心街の事業者の方々との連携をもっと深めていきたいですね。これまでもアートプロジェクトなどで商店街の方々やタッグを組むことがあるのですが、ふだんはどうしても「はっち」の内部の事業を中心に考えがちです。中心街の方々への働きかけをもっとしたいし、互いに提案し合えるようになればと思っています。

中心街の歩行者通行量も一時の増加傾向が落ち着いてきたことから、さらなる活性化を目指して、市では中心街の回遊性の向上を図る施設整備を進めています。回遊拠点として現在、建設しているのが屋根つきの広場「三日町にぎわい拠点『マチニワ』(仮称)」です。「はっち」の向かいの大型空きビル跡地の一部を市が取得して整備するもので2018年度にオープン予定。「はっち」と昨年オープンした市直営の「八戸ブックセンター」を含め、回遊性を高めるしかけが整いつつあります。20年度には「八戸市新美術館」が開館予定で、これからの八戸は本当に面白い街になっていくと思いますね。

北海道と八戸は苫小牧発のフェリーをはじめJR、空路としっかりつながっていますから、ぜひ、多くの方に八戸においていただきたいと思います。



地上5階建て、ガラスを多く用いるなど洗練された外観は、八戸の街の顔として定着し、たくさんの市民に親しまれている。建物内部も路地のような回廊や広場のような空間が、街との連続性を持った施設となっている。

今回は、dec研究員が注力している研究をピックアップしてご紹介させていただきます。今回ご紹介するのは、実践政策学 第三巻一号(2017)に掲載された論文「地方消滅・地方創生論における思想を探る」について、伊地知研究員がその概要、今後の展望などをお伝えいたします。

-研究のはじまり-

もはや「聞き飽きた」感じすらある「地方創生」。「経済財政運営と改革の基本方針2014」が閣議決定された2014年6月24日、安倍首相は地方創生本部設立に言及し「成長戦略の最大の柱は地方の活性化だ。これからの成長の主役は地方だ」と発言しました。それからわずか2年のうちに、全都道府県・市町村の99.8%において地方人口ビジョン、地方版総合戦略が策定されたことを鑑みれば、この「地方創生」は、およそ即時的な浸透と大規模な思考停止を効率よく促すような、利便性の高い、場合によっては一過性となることも厭わない「プロパガンダ」とは一線を画すものようです。

私は、この地方創生議論の発端と位置づけられ

-本論-

「地方創生」が問うのは「生き方」である

そもそも、地方創生とは何なのか。その関連法である「まち・ひと・しごと創生法」は名称からして彼の「ゆとり教育」にも類するひらがな表記特有の「ゆるさ・不確かさ」が漂いますが、同法の目的によれば、「まち・ひと・しごと」は「地域社会・人材・就業」を意味します。ここで、「地域社会」は我々が生きる「環境」そのものであり、「人材」はその「環境」で生きる「主体」そ

るいわゆる増田レポートを契機とした「地方消滅」について、そもそも「なんと雑な議論…」と不勉強なまま勝手に辟易しておりましたが、その直後に登場した「地方創生」という用語がよいよ浸透しきった段に至り、行政や地域との関わりも多岐職業柄、「地方消滅・地方創生における考え方を自分なりに整理しておかねば」と思い、本研究に着手しました。

「地方創生」ってなに？

のものであり、「就業」とはこの「主体」が生きていく上で「環境」を維持する、または「環境」や他の「主体」に働きかける主要な「行為」の一つに相違ありません。

つまり、「まち・ひと・しごと」のあり方の一体的な再構築(創生)を意図する「地方創生」とは、生きる主体(人材)が生きる環境(地域社会)において行う生きる上での主要な行為(就業)のあり方を問うものである、総じて生き方を問うものだと考えられるわけです。地方創生について真面目に考えるのであれば、「生き方」そのものについて考えることを避けられないのです。

dec研究員 伊地知 恭右「博士(工学)」

地方消滅・地方創生論における思想を探る



伊地知 恭右(いぢち きょうすけ)
昭和56年 鹿児島県日置市生まれ
平成12年 私立ラ・サール高等学校卒業
平成20年 東京工業大学工学部土木工学科卒業
平成20年 (一社)北海道開発技術センター入社
平成25年 京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻博士後期課程修了

生き方の思想

このように「地方創生の問題は、本来、生き方の問題だ」と捉えた瞬間、自覚の有無によらず「生き方の思想・生の哲学」に片足をつっこまざるを得ません。そこで、拙論では、様々な生の哲学の中でも、特にニーチェにおける「本能」の捉え方、及びこれに対するシュタイナーの解釈を参照しました。つまり、「すべて生あるもの」は「できる限り力強く、内容豊かに生きようとする」(Steiner, ニーチェ みずからの時代と戦う者, 1895)という「生を促進させようとする」(Steiner, ニーチェ, 善悪の彼岸, 1886)の存在を認識した上で、「どうすれば内容豊かに生きられるのか、どうすれば

さて、思想の再考・再構築を目指す場合には、重層的なものであれ、連続的なものであれ、あるいは見定める途上にあるものであれ、「現在の思想」と「これからの思想」を大別するという思考の過程が不可欠となります。この大別によって、「現在の思想」についての解釈が繰り返され、「これからの思想」についての検討と解釈が繰り返され、思想の再構築に向けた思考が展開していくわけですが、これは例えば、歴史に対する解釈を通じて現時点の状況を把握し未来への展望を検討する、という行為と同じことであり、当たり前の思考の過程です。

この思考の方法と展開の基本的な過程は、ヘーゲルが提唱した弁証法に他なりません。詳細は拙論をご参照いただければ幸いです。弁証法は、ある対立する命題が共に棄却かつ内包され、より真理に近い命題へと昇華(止揚・揚棄、アウフヘーベン)するという特性を有します。それ故、「これからの思想」を、これまでより、現在より、少しでも良いものにしていきたいという明確な意志、活力ある意志があれば、「より真理に近いものへと昇華する」作用、すなわち止揚を含んだ弁証法的思考が必須とな

弁証法的視点から地方消滅・地方創生の議論を見ると…

随分と前置きが長くなってしまいましたが、この弁証法的・解釈学的視点から見たとき、「地方消滅・地方創生」を巡る議論はどのようになっているのでしょうか。「生き方」の問題である以上、多様な議論があるわけですが、これらの議論を通じて「より望ましい生き方」に向かっているのでしょうか。

*1「自由市場における価格を通じた資源の効率的な配分を通じた経済厚生増大原理」への「信念」に基づき、労働市場の流動化・公共投資の過剰削減・中間組織の解体・民営化・自由化などを推進する姿勢(中野, 資本主義の預言者たち, 2015)

*2例えば、「地方消滅の畏(山下, 2014)」「農山村は消滅しない(小田切, 2014)」「田園回帰の時代がはじまった(藤山, 2014)など。

*3批判的論考において紹介されている事例は、地域の歴史的個性を尊重した取組・事象が多く、近代合理主義が無視・破壊してきた「非合理的な知:実践知・伝統知」(Oakeshott, 政治における合理主義, 1962)の集合またはその枝葉が含まれているはずなのに、その明示と解釈が不明瞭なのは残念なことです。

この生を促進させられるのかを考へる」ことを以て、拙論における「生き方の思想」とした訳です。より平易に換言すれば、ここでの「生き方の思想を考へる」とは「より望ましい生き方を考へる」という普遍的な態度に他なりません。そして、この態度・視点から見えるものは、なかなかに厳しい問いとなります。つまり、我々は、地方創生によって「あなたがたにとって、より望ましい生き方とは何なのか、再考せよ」という「生に関する問い」を突きつけられているのです。

るのです。

さらに、「哲学は、円の形をとる」(Hegel, 法の哲学, 1821)のものである以上、この弁証法的思考は漢釋法のように積み重ねる、直線的なものではなく、円環の様相を呈しながら連続・循環していくこととなります。このような、弁証法的思考が連続・循環していく様子は、活力のある思考について「解釈」という視点から捉えた「解釈学的循環」(H.G.Gadamer, 真理と方法, 1960)と相違ないものでしょう。

つまり、我々は、「生き方の思想」を再考するにあたり、弁証法的思考の連続・循環、「解釈学的循環」によってのみ、一定程度の「望ましいこれからの思想」に到達し得るというわけです。

拙論では、「地方消滅・地方創生」を巡る主要な議論をレビューすることで、「望ましいこれからの思想」に向かう過程を確認しようと試みました。具体的には、特に増田レポートおよび「増田が論じる地方創生」そしてこれに対する批判的な論考における「現在の思想・これからの思想」を描出することで「これら思想の良否・優劣はさて置き」「ちゃんと望ましいこれからの思想に向かうような議論になっているのか」を確認したのでした。

弁証法による思想の再構築

これにあたり、まず、政府が成長戦略と位置づける地方創生、特にその契機・論拠となった**増田レポート**および「**増田が論じる地方創生論**」が、我々の生活・生き方に新自由主義*1というイデオロギーを「再インストール」し、「新自由主義的な社会、新自由主義的な人生、**新自由主義的な生き方を、一層徹底していく日本**」を目指すものである、つまり「現在の思想・これからの思想」いずれも新自由主義的なものであることを確認しました。

一方、これに対する批判的な主な論考*2においては、政府や増田らが掲げる「選択と集中」のあり方への危惧、その背景にあるグローバリズムへの抵抗感を読み取ることができるものの、「我々はどうかしたいのか」ということについては、「**多様性の共生」「脱成長戦略型都市農村共生的社会**」といったパラダイムの提示とこれらに合致

このように、本研究ではなんとも憂鬱かつ尻切れ蜻蛉の結論に達してしまっただけですが、「そこまで言うなら、ちゃんとした批判がどんなものなのか示せ！」というお声が当然生じてきます。拙論にはその例示をしておりますが、要約すれば、まず新自由主義の背景にある**個人主義的人間規範**、さらにその背景にある**近代以降の合理的精神による支配**を見定める。次に、その当然の帰結として**個人の利益と合理の追求**、それ故の**共同体や地域社会の破壊**などの近代合理主義の弊害を位置づける。次に、この文脈・解釈を踏まえた上で、これら弊害を抑制・超克するための思想を暫時的にでも提示する、といった形が考えられます。

あるいは、「とにかく、今後どう生きるべきかを示せ！」という率直かつ深遠にして厳しい問いが生まれるのも必然です(上記の暫時的な思想の提示に類似)。これについては、まさに次稿に向けて検討中ですが、今のところ「**リスクの内部化**」を大きなテーマにしたいと考えています。あらゆる生物は「生きる上でのリスク」を抱えています。知恵の発達した人間は、このリスクを「外部化」することに邁進してきました。労働の外部化(機械・専門家への外注)、経済基盤の外部化(グローバリズム)、

する個別の事例紹介に留まっているものが多く、総じて思想的な立場についての言及に至っていない、「現在の思想・これからの思想」いずれも不明確であることが明らかとなりました。*

地方消滅・地方創生に関する主たる議論とは、一方に「これからは新自由主義的な日本を作っていくぞ!」という明確な思想があり、これに対抗するものとして「これまでの成長戦略はだめだ!多様性が大事だ!」といった不明瞭な思想がある、という構図になっているのです。つまり、地方創生についてきちんと考えるには「生き方の思想を考へる」ことが不可欠であり、その先に「望ましいこれからの思想」を見出すには弁証法的思考・議論が必須である、という視点が正しいとすれば、上記のような構図となっている

現状の主たる**地方消滅・地方創生論**から「より望ましい生き方・より良い未来」を期待することは、**理論的にあり得ない**、ということが示されたのです。

憂鬱な結論を超えて

生活基盤の外部化(食料調達)の外部化、教育の外部化等、代理行為と代替物で成り立つ生活全て、そして国防の外部化など、その例は枚挙に暇なしの状況です。これら、生きる行為を効率的・合理的にする努力と成果は、特に近代以降の合理的精神による支配の中で加速度的に進んできました。このような状況において、私たちは果たして「**生きている**」と言えるのでしょうか。あらゆるリスクを外部化してぬくぬくと過ごす快適な日々。平均・水平・大衆化した文化をぬるま湯の中で鑑賞・批評する日々。受信機のように各種情報に一喜一憂する日々。生活の知恵など一切なくても死なない日々。これら、特に近代以降に行き着いた「生の退廃の成れの果て」の姿から脱する、本来的生(ハイデガー)を取り戻す第一歩として、「**リスクを内部化していくこと**」について考えたいと思っています。**リスクの語源は「勇気をもって試みる」**。いつまでも勇気を外部化している場合ではない、ということです。

以上、我が身を振り返れば分不相応な、恐縮至極な提言ではありますが、これからも少しずつ「望ましい生」についての思索と実践を続けていきたいと思っています。

